

研究課題	特別支援学級・こくさい教室に在籍する子どもたちの 多様なニーズにどう答えるか？
副題	～インクルーシブ教育、外国籍児童・外国にルーツを持つ子どもたちと共に～
キーワード	特別支援学級 こくさい教室 インクルーシブ教育 外国籍児童
学校/団体名	丸亀市立城乾学校
所在地	〒763-0033 香川県丸亀市中府町五丁目15番1号
ホームページ	https://sites.google.com/joken-e.com/website/%E3%83%9B%E3%83%BC%E3%83%A0

1. 研究の背景

外国籍児童・外国にルーツをもつ児童の転入学が増加している。2019年5月時点で、丸亀市に住む外国籍の児童・生徒は、香川県全体の約4割にあたる118人、このうち、83人は日本語での日常会話や授業が難しいとされている。丸亀市は、2014年、外国人児童が多い本校に日本語の基礎を教える「にほんご教室」を設置した。しかし、1日3時間、3～6カ月間という限られた期間では日常会話の基礎を学ぶだけで精一杯で、「にほんご教室」修了後、通常学級に在籍しても、日本語が母語ではない児童にとって、授業で使われる学習言語の理解は容易ではなく、授業についていくことが難しい場合が多い。そのため、城乾小学校では、2012年に設置した「こくさい教室」で、国語や算数などの教科指導を行っている。しかし、児童数は多く、また多様で、個に応じた指導が難しい場合もある。特別支援学級・こくさい教室に在籍する子どもたちの多様なニーズに応えるための本校が抱える課題は少なくない。

2. 研究の目的

全校生は229名。そのうち、外国籍児童・外国にルーツを持つ子どもたちは、全校生の約5分の1の50名。1年生から6年生までのすべてのクラスに在籍しており、特別支援学級にもそのうちの9名が在籍している。子どもたちの母国は、ペルー、中国、フィリピン、ブラジル、カナダ・・・母国語も多岐にわたる。子どもたちは、ある程度の日常会話は何とかできるが、日本語の読み書きは難しいといった子、日本に来たばかりで、全く日本語が理解できないといった子と様々である。当然ながら、学校教育活動には保護者の理解と協力も必要である。しかし、ほとんど日本語が理解できないといった家庭が多くを占めている。本校は、2012年より市の中核校として、こうした子どもたちへの対応の研究を進めてきた。しかし、外国籍児童・外国にルーツを持つ子どもたちは増加傾向にあり、また、教職員は若年化が進んできている。若い先生方を中心に、子どもたちや保護者とどうかかわっていけばよいのかが喫緊の課題となっている。そうした子どもたちの多様なニーズにどう応えるか、研究課題を「特別支援学級・こくさい教室に在籍する子どもたちの多様なニーズにどう答えるか？」副題を「インクルーシブ教育、外国籍児童・外国にルーツを持つ子どもたちと共に」とし、子どもたちに寄り添った本校ならではの教育の在り方を探っていく。

3. 研究の経過

研究は、以下のポイントに視点を当てて進めていった、

(1) 「学び合い」活動と「仲間づくり」

① 思考の可視化思考操作

よりよい「学び」をつくるために「板書」「考えの可視化」に焦点をあてる。学び合いをしたとしても「ことば」だけでは相手に通じない。特に、発達障害のある子・集中できない子は、話すだけではなかなか伝わらない。目に見える形で示す。絵や図、表を用いた「考え」の可視化が必要となる。そこで「まなボード」等の



活用を積極的に進めていく。「まなボード」の透明シートに課題となる図形の紙を挟み込み、グループで相談しながら表面の透明シートに直接マーカーで考えを書き込み、話し合ったり、グループでまとめる前に、一人一人がもつ課題について、目的が同じ者同士が集まり、一つの資料からじっくりと読み取り、グループで紹介し合ったことを「まなボード」にまとめたりする。グループでの意見交流、全体での話し合いを通して、子どもたちの学びが探求となり、主体的・対話的な深い学びを実現する。また、思考ツールを活用することで「深い学び」の実現をめざした。

② ICT・メディア活用の推進

昨今の ICT 機器の発展、環境整備に伴い、本校でも、各教科・授業の中で ICT（電子黒板やタブレット、実物投影機、デジタル教科書、デジタル教材等）を活用する場面が多くなってきた。本校のめざす ICT・メディア活用は、ICT 機器はあくまで道具である。ICT 機器も黒板やチョークと同じ道具としてその特性を生かして気軽に活用していけばよいものとする。つまり、授業の目的は、ICT の効果的な活用方法にあるのではなく、ICT 機器を、当該の授業の目的を達成するための手段として用いるということを大切にする。「学び合い」や「仲間づくり」に ICT を効果的に活用して迫った。

③ 学び方を学ぶ

一人一人の学びを大切にするために、教師は学習者である子どもたちが、課題の解決に向けて主体的・協働的に学ぶ授業をこれまで以上に推進することで、情報化社会を生き抜く確かな学力を一人ひとりに育てていくことができる。一人一人の学びを大切にするために、教師は子どもたちが番組から受けた情報をもとに、互いに関わり合って課題解決に向かうなど協働的に学ぶことができる環境や学習過程を構想することで、学習者主体の授業を展開していくことが大切である。NHK for School コンテンツ（番組・クリップ・番組サイトの情報など）の活用を積極的に取り入れた授業づくりを進めることで、子どもが自ら学び・考え、共に伸びる学習の創造につなげた。

(2) 「仲間づくり」

① よりよい人間関係づくり

本校の児童の実態を踏まえ、より良い人間関係づくりを進めていくことが大切である。友達や周りの人とかわり、その中で自己有用感をもち、他者を大切にする気持ちへとつなげていきたい。例えば、朝の活動の時間に、構成的グループエンカウンターやソーシャルスキルトレーニングを取り入れた活動を行い、仲間づくりを進めていった。

また、友達の良さだけでなく、自分の良さにも目を向け、自分も人も、同じように大切な存在であることを実感させていきたい。そのために、AYG カードを活用し、お互いの良さを伝え合い、自分の良さにも気付けるようにする。さらに、ワールドフェスタやなかよしオールスターズの活動を充実させることで、人権や仲間の大切さを知ったり、ペア学年の団結を促したりした。

(3) 具体的な活動内容としての重点項目は、以下の4点である。

① 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築

研究課題に基づき、共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築をめざす。具体的には、iPadの翻訳アプリなどを用いて、外国籍児童との高度な意思疎通を実現。また、個に応じた支援の域を行い、その実現をめざした。

② iPadの活用、支援の個別最適化をめざして

子どもたちの多様なニーズにあったアプリを活用、支援の個別最適化をめざす。使用するアプリはAI型タブレット教材「Qubena(キュビナ)」を予定している。研究授業においては、ただ単にICT機器・アプリの活用で終わるのではなく、ICT機器を活用したことで授業がどう改善されたのか、また、ICT機器の活用が子どもの学力の向上につながっているかの観点でも検証を行った。

③ 発達障がいがある子のための学習机「イー・チェック」の活用

イー・チェックの効果とされている、「集中できる空間」をつくる、「集中できる姿勢」が保てる、「寄り添い学習」がワンタッチの3つの効果のエビデンスの検証を行う。具体的には、実際にイー・チェックを使用した子どもたちや教師へのアンケート・聞き取り調査を実施した。

④ ソーシャルスキルトレーニングソフトウェア「SSTS」の活用

特別支援学級や発達障がいのある子どもたち、こくさい教室に在籍する子どもたち(外国籍児童・外国にルーツを持つ子どもたち)にとって、ソーシャルスキルの習得は、必須である。新たなソーシャルスキルトレーニングとしてiPadと「SSTS」を効果的に活用することで、スキルの確実な定着と子どもたちのQOLの向上をめざした。

また、iPadを活用しての個の支援、個別最適化を研究の柱とし、こくさい教室や特別支援学級でのタブレットの活用は1人1台を想定し、タブレットやアプリ「Qubena(キュビナ)」「SSTS」「ロイロノートスクール」等の機能を最大限に活用し、個のニーズに応じた支援を行った。さらに、特別支援学級では、学習者用デジタル教科書を活用しての学習も行った。

4. 代表的な実践

(1) 思考の可視化思考操作とICT・メディア活用の推進 4年生算数科「垂直・平行と四角形」の実践から

平行や垂直は基本図形の特徴を捉えるときの重要な観点である。そこで2本の直線の関係性を実感させるために作図活動を多く取り入れた。その際に、視覚的に直線の関係性を捉えさせるためにタブレットを用いて動画撮影を行い、子どもの作図技能の定着に重点を置いた。



三角定規の直角を使って平行な直線を引く手順をあらかじめ示しておき、作図の様子はiPadを利用して動画を撮影する活動を行った。この活動のねらいは「作図のポイントを視覚的に動きで知り、何度でも挑戦・修正できる」ことである。正確な平行な直線の作図のためには三角定規のどの位置を押さえるとよいのか、どのように動かすとよいのか、直線を引くときにどんなことを注意すればよいのかなどのポイントを自分たちで見つけることができた。また、撮影時には班

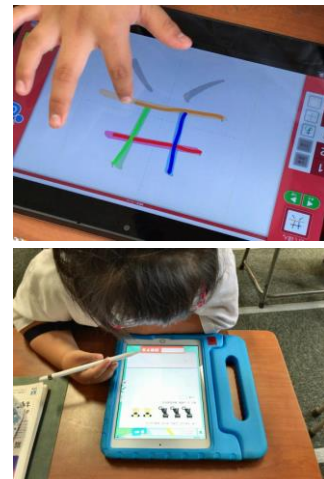
(3人組一班構成)で「三角定規を動かす」「説明をする」「動画を撮る」という役割を提示し、交代しながら繰り返し操作活動を行った。役割を交代しながら活動を行うことで一人一人の技能が向上した。また、直角を利用して平行な直線を作図するために実際に三角定規を手で動かしながら動画を撮影することは、操作活動を通して平行の意味を理解し、次時の四角形の性質に注目することにつながった。

(2) iPadの活用、支援の個別最適化をめざして

特別支援学級を中心にAI型タブレット教材「Qubena(キュービナ)」を活用している。AIによる個別最適化学習+教師の支援によるハイブリッド型学習を行っている。Qubenaと教師の支援を組み合わせることで、子どもたちの学習をサポートし、一人一人の「わかる」を深める。特に特別支援学級では、一律に学年相応の学習を進め、内容の定着を図ることは難しい。個のつまずきや理解に応じた支援が必要である。学年を遡り、基礎・基本を繰り返し学習することによって新たな知識・技能の習得を可能とした。

子どもたちの感想は概ね好評である。iPadだけでなくApple Pencilの活用とあわせることで、iPad上での細かな作業にも対応し、紙と鉛筆を使った時と相違ない学習活動が展開できている。子どもたち自らが進んで、意欲的に学習に取り組む姿は、本校の教育方針である「自ら学ぶ」を具現化した姿である。

漢字の学習において、教育同人社の「指書きレッスン漢字」や光文書院の「デジタル漢字ドリル」を活用している。従来の漢字ドリルの枠を超えた、まさに個別最適化の教材である。漢字を知る、調べるにとどまらず、熟語や漢字の成り立ち、書き順の確認や使い方の確認、そしてなぞり書き。漢字を何度も繰り返し練習し漢字を身に付ける。こうした機能がすべて使えて漢字ドリルを購入した子どもたちは無償で使うことができるアプリである。Qubenaと同じく、学年相応の漢字の学習だけでなく、個のつまずきや理解に応じた支援が可能となった。学年を遡り、自分の学習内容の定着を確認し、苦手なところを繰り返し学習することができている。その他にもアプリには、フラッシュカードや漢字組み立てパズル、漢字めくりゲームなど様々な要素があり、学習の継続といった点からも有効であった。



(3) 学び方を学ぶ

NHK for School コンテンツ等視覚的教材の活用を積極的に取り入れた授業づくりを進めている。NHK for School コンテンツの活用について教師に説明するのは、今さら・・・感が強いが、若い先生方にとっては、初めてであったり、そもそもNHK for School コンテンツを知らないという先生方も少なくない。教室環境を整備し、大型画面で視聴できるようにするとともに、校内研修において、いくつかの番組を取り上げ、実際の授業における具体的な活用方法の研修を行った。その結果、社会科や理科だけでなく、国語科や算数科、道徳や体育、学級活動など多くの学習場面での活用が進んでいる。さらに、フライデーモーニングスクールなどを子どもたちに紹介し、また授業で活用することで、家庭学習や長期休業中の学習につなげた。これらも本校の教育方針

である「自ら学ぶ」の具現化につながっていった。

また、特別支援学級やこくさい教室に在籍する子どもたちを対象に、「NEWS WEB EASY やさしい日本語で書いたニュース」を活用しての学習も進めた。このサイトでは、外国人や小学生・中学生のために、わかりやすい言葉でニュースを伝えている。これまで、本校では、どの子どもたちにも「わかる」ように、ユニバーサルデザインの手法を取り入れた研究を進めてきた。

(4) 発達障がいがある子のための学習机「イー・チェスク」の活用

イー・チェスクの効果とされている、「集中できる空間」をつくる、「集中できる姿勢」が保てる、「寄り添い学習」がワンタッチの3つの効果のエビデンスの検証を行った。本助成金で1台を購入、イー・チェスクを製作している横山工房の協力で、さらに2台の貸し出しを受け、合計3台で検証を行った。本校における特別支援学級は3クラス（知的2クラス・情緒1クラス）とも多学年の児童による複式学級編成（1組 4年2名・6年4名 2組 2年4名・3年2名 3組 2年2名・3年3名・4年1名・6年1名）である。これまで児童が集中して学習に取り組むことができるような環境をつくるのは難しかった。しかし、イー・チェスクを導入することで、視界を制限するパーテーションを活用、隣の子の様子などが視界に入らず、集中して、また落ち着いて学習に取り組めるようになった。また、B児は身長が低く通常の椅子では姿勢を保持するのが難しい。イー・チェスクは、座面の高さを段階的に変えられ、サイドガードや足置きステップを併用することで、集中できる姿勢を確実に保つことができるようになった。子どもたちからもイー・チェスクを使って勉強したいにも好評である。教師にとっても、パーテーションを開け個別支援をすることもできる。台数の関係で、常時使用する環境ではないが、学習の展開に応じて児童自らがどこで学習するか選択できるようになってきている。今後も効果の検証を続けていきたい。

(5) ソーシャルスキルトレーニングソフトウェア「SSTS」の活用

特別支援学級や発達障がいのある子どもたち、こくさい教室に在籍する子どもたち（外国籍児童・外国にルーツを持つ子どもたち）にとって、ソーシャルスキルの習得は、必須である。新たなソーシャルスキルトレーニングとしてPadと「SSTS」を効果的に活用することで、スキルの確実な定着と子どもたちのQOLの向上をめざした。具体的には、ソーシャルスキルの指導は、様々な技法と、個別・集団といった場面の組み合わせが有効である。これまでソーシャルスキルかるたや「NHK for School」の中のソーシャルスキルの指導を扱う特別支援番組「スマイル！」を用いて指導を行ってきた。今回、ソーシャルスキルトレーニングソフトウェア「SSTS」を用いて家庭や学校でよくある場面でどんな行動をとったらいいか、シミュレーション・ロールプレイをしながら繰り返し学習を行った。教師が画面を提示して全体で指導を行ったり、1人1台環境を生かして個別に進めたりと、状況に応じて学習を展開することができた。

(6) こくさい教室における取り出し授業

本校では、こくさい教室において加配講師2名による外国籍児童・外国にルーツを持つ子どもたち対象に、そのニーズに応じて取り出し授業を行っている。10月に、全員参加で研究授業を実施した。第2学年算数科で単元は「かけ算1」である。JSL児童は学年



相当の少人数授業を行う中で、学習中のルールを身に付け、正しい日本語で文章を書いたり自信をもって話したりできるように練習している。本単元の学習では、「1つ分の数(かけられる数)」「いくつ分(かける数)」「ぜんぶの数」「〇のいくつ分」「～ずつ」等の学習言語や学習に使う言い方、かけ算の意味など正しく習得できるよう、式やブロック、図とつなぎながら何度も言う場を大切に、定着を図った。子どもたちの多様なニーズに一つ一つ丁寧に答えていた。また、環境を整え、iPad を授業で積極的に活用することができるようにすることで新しい学びの形(1人1台端末時代)が見えてきた。

5. 研究の成果

iPad を活用しての個の支援、個別最適化を特別支援学級及びこくさい教室で実施した。特別支援学級では、1人1台環境のもと、学習者用デジタル教科書も活用し、個のニーズに応じた支援ができた。A児は、iPad アプリを活用して、都道府県名を全て漢字で覚えた。こくさい教室では、主に教師が提示用として活用するだけでなく、児童が自ら進んで活用する姿が、日常的に見られるようになった。

6. 今後の課題・展望

これまで学校としても大きな研究会を受けておらず、授業における教師の発問等に焦点を当てて研究を行ってはいしたが、比較的緩い感じで研究が進められていた。本実践研究助成を受けたことにより、研究のめあて・目標・ゴールが明確になり、教師の意識が大きく変わった。本校の特色である、外国籍児童・外国にルーツを持つ子どもたちが多数在籍するということを課題ではなく強みと捉え、その子どもたちの多様なニーズにどう答えるかという、教師の使命感が改めて認識された。また、同時に GIGA スクール構想により、1人1台端末をはじめとする教室の教育機器の整備が大きく進んだ。「特別支援学級・こくさい教室に在籍する子どもたちの多様なニーズにどう答えるか?」の研究テーマを継続し、1人1台端末を効果的に活用したインクルーシブ教育を全学級にて実施していきたい。また、デジタル・シティズンシップ教育を柱としたコンピュータ1人1台時代の善き使い手をめざす学びの追求も進めていきたい。

7. おわりに

当初は、特別支援学級・こくさい教室に在籍する子どもたちに限定して研究を進めていた。特別支援学級は、知的2クラス、情緒1クラスの3クラスがあり、多様な子どもたちが在籍している。人数も多く、個に応じた支援の難しさを感じた。また、こくさい教室に在籍する子どもたちの母学級での取り組みは、教職員のインクルーシブ教育への取り組みの共通理解が十分ではなく、今後が期待される。

8. 参考文献

・ソーシャルスキルトレーニングのための ICT 活用ガイド/出版社 グレートインターナショナル/著者 山西潤一 水内豊和